

曲目解説：白井史人

アルノルト・シェーンベルク（1874-1951）にとって、人の声とピアノは生涯にわたり最も身近な「楽器」であった。シェーンベルクが20～40代にかけて残したピアノ曲と歌曲は、後期ロマン派から無調、さらに12音技法などその作風の変化を鮮やかに映し出している。

#### 「山鳩の歌」(《グレの歌》より)

《グレの歌》(1900-1911)は、大規模な管弦楽、合唱、5名の独唱者と語り手による3部構成の長大な作品。詩は、デンマークの詩人ハンス・イェンス・ペーター・ヤコブセンによる。この「山鳩の歌」は第1部の末尾に置かれ、愛するトーヴェの死を嘆くヴァルデマール王の悲嘆を歌う。陰影豊かな調性的響きのなかで動機が複雑に絡み合い、初期作の充実ぶりを示す。

#### 「感謝」《2つの歌》op. 1-1 (1898)

シェーンベルクが作品番号を付して発表した最初の作品で、詩はカール・フォン・レヴェツォウ。口短調／ニ長調の間を揺れて開始する和声と旋律にはブラームス、ワーグナー、ヴォルフらの影響が色濃く、レーガーにも通じる後期ロマン派の響きが艶やかである。

#### 《2つの歌》op. 14 (1907/1908)

第1曲は、シェーンベルクがシュテファン・ゲオルゲの詩に初めて作曲した作品で、「無調」への傾向を明確に打ち出した時期の佳作。私生活では、妻・マティルデと、シェーンベルク自身とも親交があった若き画家ゲルストルとの三角関係に悩まされていた（画家は最終的に自殺する）。第2曲は、カール・ヘンケルによる詩。ライナー・マリア・リルケの詩による《渚にて》(1909)は、作品番号は付されていないが、作品14と同時期に書かれた。

#### 《4つの歌》op. 2 (1899/1900)

第1～3曲はリヒャルト・デーメル、第4曲はヨハネス・シュラーフの詩による。各曲が独立して作曲されたが、1903年に出版された際にまとめられた。とりわけ第1曲「期待」など、印象主義的な旋律線や伴奏が絡み合う繊細さが特色。

#### 《6つの小さなピアノ曲》op. 19 (1911)

無調期の代表作で、1911年2月19日、わずか1日のうちに大部分が作曲され

た。アフォリズム風の凝縮された小品が並ぶ。反復するリズムに基づく第2曲、ワルツ風の第5曲、静かな和音に旋律の断片が浮かびあがる第6曲など、細部が丹念に作り込まれている。

#### 《架空庭園の書》 op. 15 (1908/1909) より

シュテファン・ゲオルゲの詩による無調期を代表する歌曲集。本日は、全15曲のなかから後半の4曲を抜粋して演奏する。「架空庭園」とは、古代バビロニアの女王セミラミスが築いたとされる階段状の庭園のこと。第10曲では、ピアノ前奏の冒頭で登場する「嬰ト-イ-ニ」の和音が歌い出しの旋律を先取りするなど、和声と旋律が緊密に連携している。

#### 《5つのピアノ曲》 op. 23 (1920/23)

長いブランクののちに発表され、無調的語法を体系化する12音技法の導入を決定づけた記念碑的作品。テンポや性格付けが異なる5曲が多声的に展開する。第5曲「ワルツ」では、「嬰ハ-イ-ロ-ト-変イ-嬰ヘ-嬰イ-ニ-ホ-変ホ-ハ-ヘ」の12音からなる音列が冒頭の旋律で登場し、全体を構成していく。